

椿泊集落における空間の構造化のための実体の獲得

日大生産工（院） ○加藤 絵理
日大生産工 篠崎 健一

1. はじめに

日本全体が縮小社会に向かう現在、人口減少や世帯の極小化、後継者不足による高齢漁家の増加など、漁村集落が抱える諸問題は深刻化している。特に、空き家の増加、商店等の閉鎖、伝統的祭事の衰退などは、集落の空間構成、街並みの景観にも大きな影響を与えている。そのため、日本全国で集落の再生や活性化が行われているが、それぞれの集落の特性や生活の営みを把握しきらず、どの集落でもほかの集落と同じようなことが行われているのが実情である。また、活性化をはじめようとする時期は、ほとんどが地域が廃れ行く寸前（いわゆる『限界集落』となってから）である。

そこで、ある程度集落の機能や住民の生活水準が維持されているうちに、実際にその漁村集落の中で生活を体験し、実態を把握した上で内外の視点からその集落を捉え直し、活性化の取り組みを考えることが必要なのではないかと、筆者は考える。

2. 研究の目的

前項で示した問題に対して、地域内外の複眼的視点からの、空間的な提案も含めた、新たな地域活性化案を提示することを目的とする。

具体的には、椿泊集落をフィールドとして、地域外居住者が実際に集落での生活の一端を体験することで作成した空間体験の記述と、住民の口述、実態的な調査の結果とを分析、思考することで『小さな拠点』を考案する。その手法として、筆者らの空間体験の記述、住民から得た口述により巨視的に捉えたものごとを、KJ法により、事象の示す意味を抽出し、空間の構造化を試みたいと考えている。まず、「あること、あったこと、体験したことの表記」を行い、そこから「潜在的なことの発見」をし、「あるべきことの考案、思考」を行うことで「空間『小さな拠点』の創造」に繋がりたいと考えている。

本論文の目的をまとめると次の通りである。

- ① 実地調査の①実地調査の作業を通して椿泊集落の空間構成、実態、状況を見る、知ること

- ② 写真日記と口述カード3を基礎資料として KJ法を行い、事象の示す意味を主題化し抽出すること
- ③ 抽出された主題から空間の構造化を行い、再活性化のための『小さな拠点』案を提示すること

本稿では①の実地調査による空間構成の把握と、実態、状況についての調査結果を報告する。また基礎資料としての写真日記を紹介する。

3. 調査対象地域の概要

調査対象地域である椿泊町は、徳島県東部の阿南市にあり、四国の東端部にあたる蒲生田岬の北側に、平行に東に突き出た半島の燧崎（ひうちさぎ）の西側に位置する漁村集落である。図1に椿泊漁村集落の位置を示す。北側に迫る急傾斜な山と南側の深い入り江の間にある帯のような細長い平地に、約2kmにわたって家々が建ち並ぶ。

椿泊町の人口推移は、森家2代目村春が入部した天正年間（1573～91）に森家の家来48軒を合わせて160軒、明治9年2365人（うち士族322人）、大正8年3779人、昭和15年4500人、昭和20年代をピークにその後徐々に減少し、平成12年には306世



図1 研究対象地の位置

A Study on the Essence for Structuring of Spatial in Tsubaki Domari Village

Eri KATO and Kenichi SHINOZAKI



図2 椿泊集落の全景（2009）

帯 887 人、平成 25 年に 243 世帯 609 人となっている。ここ数十年では世帯数は約 20%、人口は約 31% 減少している。人口がピーク時の世帯構成は、約 7 割が漁師、残りは商家と仕舞屋（しもたや）だったとされる。現在は約 8 割が漁業者である。

4. 調査方法

4. 1. 生活の体験

調査方法としては、8 月 13～14 日、9 月 14～15 日、10 月 16 日～10 月 20 日の計 9 日間現地に滞在し、その期間は、実際に集落の生活の一端を体験した。（日常と非日常とを体験するため、普段の生活と盆や祭事時に合わせ複数回滞在した）。

4. 2. 集落空間の概念

現地で椿泊集落全ての建物の玄関、庭、水場等の位置を調べ、地図に記録した。また、主道路、路地、海側のどちらに対して平入りであるかどうか、同時に、建物用途を家屋と倉庫、公共施設等の家屋でないものにと分類し、祠やお墓の位置も把握した。また、網元であった糠塚地区の角元家の実測調査も行った。調査中、出来る限り住民の方と接し、普段の生活や、集まる場所等についてお話を伺ったり、一緒に体験させていただいたりした。

5. 調査結果

5. 1. 集落の構成

集落を東西に貫く中央の一本道を挟み、北側は背後に迫る崖と道路との間の敷地ギリギリに住宅が建ち、南側の敷地は護岸を通して海に面しており、比較的敷地に余裕があるためか、鑑賞庭や菜園、納屋が置かれていることが多い。南側には護岸上に人が歩ける程度の道が、これも集落の東から西まで続いている。

集落には 5 つの字があり、集落のひとつとは傍示（ほうじ）と呼ぶ。集落の東から「東」、「寺谷」、「出島」、「糠塚」、「小吹川原」である。それぞれの傍示内での結束力は強く、森家の功績を讃え、豊漁を祈願する集落の祭り『だらだら祭り』だけでなく、各集落にはそれぞれ祠や神社があり、秋には小祭りが行われている。

また、普段から集落のひとつとが集落空間の中で集まる場所として、佐田神社の前と、椿泊漁港の前があった（図3）。佐田神社の前には、主に女性の高齢者が集まり、おしゃべりやお茶を楽しんでいる。椿泊漁港の前では、漁の前、漁の後など漁師、海士たち（主に男性）が集まり、おしゃべりや情報交換をしている。これは昔、集落の東と西とで、商人町



図3 椿泊集落の配置図

と漁師町とが分かれていた名残を残しているように思える。図3に椿泊集落の配置図、各傍示の祠の位置を示す。

5. 2. 集落の家並み

集落の建物のうちほとんどが、切妻屋根、主な出入口は主の道路、主の道路に面していない場合には路地側に設けられており、平入りの2階建ての建物である（一部例外を除く）。桁方向は総2階、妻方向は道に対して2階部分がセットバックしており、道に面した1階には小庇が設けられ、その小庇の多くが現在の道路境界線からはみ出している。また、各住戸には主な出入口の他に、勝手口その他の出入口が必ずひとつ、もしくは複数ある。出入口付近においては、多くの場合水場、または井戸（現在は使われていないものが多い）が設けられている。図4に椿泊集落の家並み、図5に、糠塚地区を例として椿泊集落の概念図を示す。図5に示された角元家は、かつて網元をしていて、今回実測をさせていただいた住戸である。各住戸は、古くから生業を漁業としているため、主の道路から海側に抜けることの出来る通り庭を有するものが多い。特に主の道路より南側の住戸では、主屋の建物の他に、水回りの部屋（建物）、納屋を設けていることがある。配置は、主屋側に水周り、海側に納屋である。これは、かつて集落内に網元がたくさんいた時代、船子たち連れ漁から帰ってきた際、家の前の護岸から家の庭に入り、まず風呂、ご飯を済ませてから主屋に入るといった生活様式があったからである。通り庭は、水回りの部屋へのアクセスともなっている。水周りの部屋へは、住戸の間を山側から海へ流れ出る水路から水を引き使用していた。今でも水路側に水のタンクを残す住戸もある。そのため、水回りの部屋など主屋以外の建物のほとんどの場合が、路地または水路側に寄せて建てられている。実際に実測を行った角元家の平面図を図6に示す。また、現在は、庭先に出て庭仕事をしたり、洗濯物を干したりする際に、



図4 佐田神社から見た椿泊集落の家並み

護岸上の道を歩く人と立ち話をしたり、海を見たりして、護岸上の道は住民同士のコミュニケーションが生まれる場であった。

住戸のファサードは、道路側では、1階、2階ともほとんどが開口部であるが、玄関と腰窓、戸袋で占められている。1、2階とも腰は低く、外側に、時代を象徴する手摺がついている。格子が設けられている例もある。一方、護岸上の道から見た南側では、海側に庭や菜園を設けている場合、大きく開けた開口を有することが多い。先程述べた小庇と窓の手摺、格子が、この集落の特徴的な道路空間をつくり出している。図7に、糠塚地区を例として、連続立面図を示す。

5. 3. 集落の景観の変化と問題点

集落の機能が残っているということは、ひとびとがそこに住み続けているということである。今の時代において、それは必然的に、そこに建つ建物（住戸）の更新も行われていくということに繋がる。世帯数、人口の減少に伴って、商店の数や家屋の数が著しく減少し、街の活気が失われ、空き家や空き地が増えることももちろんそうだが、新たな世代が住む際に行われた建物の更新も、集落の景観に大きな影響を与えていることは確かである。椿泊集落においては、主の道路ギリギリまで建っていた住戸は、道より下がって建てられ、庇が重なり合うような道路空間は失われつつある。住戸間には壁が存在し始め、路地空間は失われるか、殺風景な生活の感じられないものへと変化しているところもある。人が住み続けることで集落が維持されていくことと、集落の景観が失われることは矛盾であるが、歴史的な街並みの存在価値を共通認識するのは容易ではなく、難しい問題である。



図5 椿泊集落の概念図（糠塚地区）

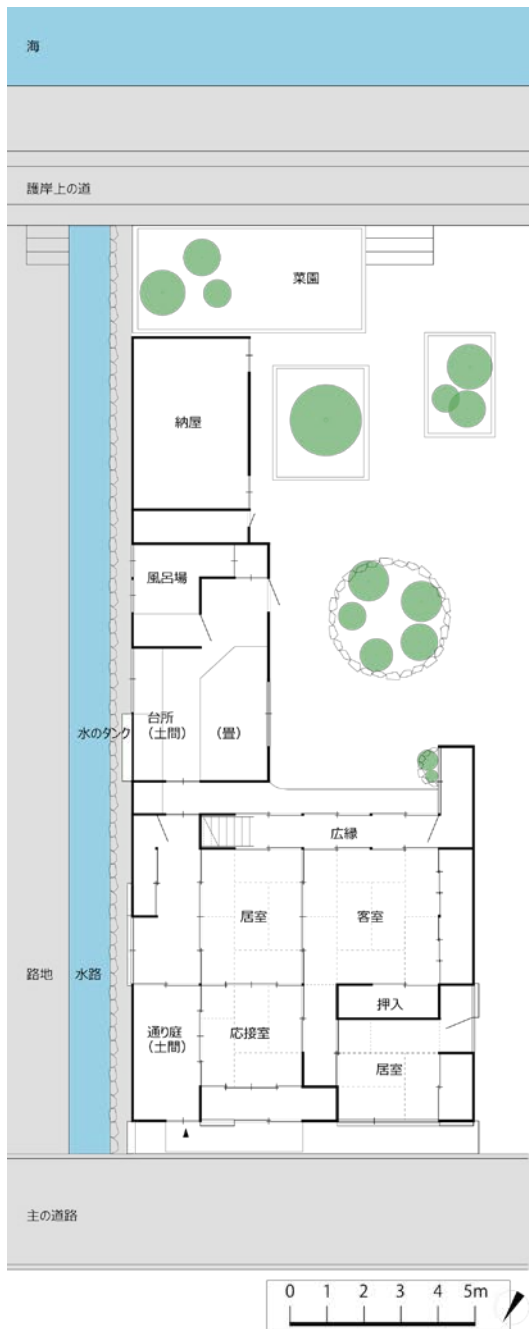


図6 角元家の1階平面図（糠塚地区）

「参考文献」

- 1) 阿波のまちなみ研究会（編），「阿波のまちなみ探訪」（2008）p. 58-59.
- 2) 久米将夫（他）「徳島における町並み実態調査-日本建築学会四国支部徳島支所／地方都市研究-」（1999）p. 13-35.



図7 椿泊集落の連続立面図（糠塚地区）